

第4回

伝える1(書面アンケート方式)

(1) プログラム

新型コロナ感染症拡大に伴い、会場に集まるワークショップではなく、書面でアンケートに回答いただく形で行った。

日時 | 9月16日(金) 回答締切

内容 | これまでのまとめを元に、下記7つの問いに回答してもらいました。

1) 第2回について

Q1 第2回のワークショップで、強く印象に残っていることを教えてください。

Q2 Q1で記載した印象に残ったことを、誰かに伝えましたか？

伝えたという方は、相手の反応等、覚えていることがあれば教えてください。

Q3 Q1で記載した印象に残ったことを人に伝えるとしたら、どのように伝えるとよいと思いますか？「誰に／どんな方法で／どんな工夫をして」等、思いつくアイデアがあればなんでも自由にお書きください。

2) 第3回について

Q4 第3回のワークショップで、強く印象に残っていることを教えてください。

Q5 Q4で記載した印象に残ったことを、誰かに伝えましたか？

伝えたという方は、相手の反応等、覚えていることがあれば教えてください。

Q6 Q4で記載した印象に残ったことを人に伝えるとしたら、どのように伝えるとよいと思いますか？「誰に／どんな方法で／どんな工夫をして」等、思いつくアイデアがあればなんでも自由にお書きください。

3) これまでの3回のワークショップを通して

Q7 最後に、これまで3回のワークショップでお気づきの点や、人に伝えることに関しての工夫やご苦勞等があれば、なんでも自由にお書きください。

(2) アンケート回答 (一部抜粋)

回答の中から、一部抜粋して掲載します。

1) 第2回について

Q1 第2回で、強く印象に残っていること

■構えずに相互理解していくこと

- ・構えずに自分のことを話しお互いを知るの、決めつけずに共存するために大切なこと。
- ・障害を受け入れる過程は大変なことと思う。
- ・できることできないことを隠さず、時間をかけて対話しながら理解を深めていく必要がある。
- ・こちらの気遣いで逆に心の距離ができてしまう可能性があることを知った。
- ・今まで経験したことがない方法での自己紹介が印象的。普通に自己紹介するよりも、お互いのことを尊重しておこなえた。

■新たな気づき

- ・体験の価値観の違いを体感できた。視覚障害者が「スキーが好き」という話に、「怖くないか」「自分にはできない」と思ったが、「見えていた時よりも上手になった」とのことで、自分の中に「目が見えない＝スキーは怖い」という固定観念を持っていたことに気づかされた。
- ・「コンビニの入口は明るくてビニル袋の音がするので見つけやすい」視覚障害者、「店員がマスクをしているとコミュニケーションがとりづらい」聴覚障害者がいて、「なるほど」と思った。
- ・「障害を誰かの基準で考えると、基準以外の人は話しにくくなる」との考えを新しく感じた。

■心のバリアがある

- ・「障害があるとできないのではないか」との決めつけや「自分と違うことが想像できない」ことが《心のバリア》であること、また「障害者も自分の障害を人に言うことが難しい」といった《心のバリア》があることを知った。
- ・先入観により、《心のバリア》はつくられる。

■五感の活用

- ・深掘り自己紹介で、目の不自由な方が匂いや音でコンビニを識別しているという話があった。私も場所特有の音や匂いには敏感だが、その方は好き嫌いの感情というより、あくまで「識別」の仕方という話だった。

■多様性を実感

- ・ユニークな自己紹介。利便性だけで使う方、楽

しみにしている方等、いつものコンビニを多角的に捉えることができた。

■ひとりの人から考える

- ・日常場面を設定した自己紹介が印象的。個人の行動には違いがあり面白いと感じると同時に、障害もそういった違いの一つだという捉え方が社会全体でできたらよいと感じた。
- ・コンビニの使い方一つとっても、使いにくさや多様な行動があることを実感。同じ障害を持っていても意見がわかれることもあり、個人差が大きいと考えさせられた。

■グループワークの良さを発見

- ・普段、意識していない「なぜコンビニに入るのか」という根本を考える機会になった。また、話題が「外国人労働者」にまで広がったのも印象的。複数人で物事を考えると思いもよらない発見や多様なアイデアにつながることを体感。

■その他

- ・長田さんの話の中で、自身の障害やそれに伴う苦勞から得た経験をもとに、他者のために行動する姿勢は見習いたい。
- ・学生時代にアルバイトをしていた経験を思い返した。確かに障害があると使いづらい点が多く、そういった方の来店は見たことがなかった。一方、少数のスタッフでの運営では、全てに対応するのは厳しい面があるとも感じた。

Q2 Q1の内容を誰かに伝えたか?

■仲間・同僚・子どもと話した

- ・仲間で、レジャーについての体験や、それぞれの困りごとの違いや生活上の工夫を話した。
- ・職場の同僚に伝えた。
- ・色を認識できる視覚障害者や、大きな音であれば認識できる聴覚障害者がいる、人によって違いがあるという話をした。
- ・会社のマネージャー研修のグループワークで伝えた。興味を示す人が多かった。
- ・小学生の子どもと話をした。同学級に障害を持つ子がいる。障害がある友だちができないことを、自然と手伝う様子を見て、「一緒に遊ぶ」というプロセスは大切だと感じた。

Q3 伝えるアイデア

■誰に

- ◇保育園・幼稚園、小中学校、高校の授業で
- ・会話が苦手な人も自分のことなら話すことができる。参加の機会を増やし多様な発見をする。
- ・幼い子ども、小中高生、子育て中の保護者。ワークショップ的な感じで、褒めて行うのがよい。

◇身近な人

- ・家族に普通に話す。
- ・ワークショップで感じた自分の考えを職場で伝えることが、自分の考えに変化をもたらし、区民のために役立てるようになる。

◇事業者

- ・事業者に参加してもらい当事者の話を聞く。

■どんな方法で

◇様々な暮らしの場面

- ・コンビニ以外にも、病院は？駅のトイレは？等、まちのあらゆる場所について話しあう。職場ではチームビルディングにも使える。

◇ニュースを活用して対話

- ・UDに関わるニュースを取り上げて、対話形式で多様な人の考え方を共有しあう場を設ける。

◇まち体験でシミュレーション

- ・例えば「みんなに優しいUD無人化店舗シミュレーション」を、実際の店舗で考える。様々な立場の人のことを考えるきっかけになる。

◇感覚を大切に

- ・多様な人に使いやすいかを、五感（音、匂い等）の感覚面も大切にして考える。

◇当事者が話す

- ・子どもたちに理解してもらおう。出前講座のように、当事者が出かけて直接会うことが大切。
- ・必ず当事者の体験を話したい。場合によっては、写真、ビデオ、書物を紹介する。

◇手紙、掲示板

- ・手紙等で伝える。
- ・目に留まるような工夫をして掲示する。

■どんな工夫をして

◇障害のラベリングをしない伝え方

- ・「〇〇障害を持っている人はこう感じている」との決め付けから始めるのではなく、「コンビニは急いでいる人がいるので使いづらい」と感じる人はどういう人だろう？と考える。
- ・障害にとらわれない人との関わり方を、みんなで話しながら考えられるとよい。

2) 第3回について

Q4 第3回で、強く印象に残っていること

■手話による絵本の読み聞かせの豊かさ

- ・野崎さんの手話は、いろいろな表現の工夫が感じられる切れ味のある表現だった。
- ・野崎さんの読み聞かせの素晴らしさを、多くの方に知ってほしい。
- ・聴覚障害者は、手話がコミュニケーションの手段であること。
- ・手話での読み聞かせを初めて知った。
- ・参加者のみんなが「伝えたい」と強い思いで行っていたのが印象的。

■読み聞かせで手話と言語を一致させる

- ・手話と文字の学習は別物であることを知った。
- ・例えば子どもたちに「青」を実感してもらうため、「空も青いね」「手話だとう表現するね」と、手話と言語を一致させることが大切ということが印象的。読み聞かせの基本だ。

■体や表情で伝える

- ・絵本を、体や表情で伝えること。
- ・手話に対して難しいイメージがあったが、自由な表現もあることを知った。
- ・動きや表情から伝わる印象を大事にしていると思った。伝えたい気持ちがあると伝わるのは、どの言語も共通の事であると改めて気づいた。
- ・野崎さんの手話を見て、「手」だけではなく、表情も重要な要素であると思った。とても豊かな表情で、大人でも引き込まれる魅力がある。
- ・野崎さんの読み聞かせは、手の表現だけではなく、顔の表情や動き等全身を使って絵本の世界を伝えていたのが強く心に残った。
- ・野崎さんの話の間や表情、動作が印象的だった。また、手話で伝える難しさも体験した。
- ・想像以上に難しかった。表現しようとする、体を大きく使いがち。野崎さんの手話は表情で伝える等、すごいひと言。

■相互理解が大切

- ・障害のある人もない人も平等であり、互いを理解し助けあう事が大切。
- ・身体の動きや顔の表情を使ったコミュニケーションは、普通に話す以上に伝わると感じる瞬間があった。また、議論時、全員がフラットで年齢、障害、性別等の壁を感じなかった。
- ・どうすれば相手に伝わるかを協議し工夫して行うことで、他者への理解が深まったと感じた。

- ・人により表現や解釈が異なり、個性や違いを感じた。それらの違いがありつつも、全体で一つのものをつくり上げる一体感もあった。

■手話を身近に感じる

- ・「手話って難しい」「手話は高度な人にしかできない」との先入観をなくすための体験だと思った。「できないと決めつけない」ことが大切。
- ・動きや表情から伝わることを大事にしていて、これまでより手話を身近に感じられた。
- ・長い時間手話を見ていると、何を話しているかはわからなくても、身近に感じた。

■特性による理解の違いを実感

- ・例えば「雲がもくもくとわく」という表現を、聴覚や視覚に障害がある人はどう感じるか。
- ・絵本は絵だけで伝わるものもあるが、視覚障害者はオノマトペ等の音で感じていくと思った。

■その他

- ・自分の名前を手話で表現すること。
- ・しゅわえもんの活動で、キャンプに参加した子どもたちが成長してスタッフになりたいと戻ってきたという話。
- ・昔、学校により手話が異なっていた話は驚いた。

Q5 Q4の内容を誰かに伝えたか？

■興味を示してもらった

- ・友人に話した。「へえー、そうなの」という感じ。やはり周りに耳の不自由な人がいないと考える機会がないので知らないのだと思った。
- ・若い外国人の男性に話した。「考えたことがなかった、たいへん興味深い」という反応。
- ・障害には様々あり、困っている事もそれぞれであることを伝えている。
- ・ママ友に、昔自分が「真っ暗読み聞かせ（点字絵本）」をやったことを思い出しながら話した。
- ・聴覚障害者が日常生活でどんな助けが必要かや、全ての聴覚障害者が手話で話すわけではないことを伝えた。

■手話について伝えた

- ・友人に、覚えた名前の手話を伝えた。
- ・手話を体験したことを、職場で伝えた。

■体験できるとよい

- ・体験したことは伝えられるが、表現の深さを伝えるのは難しい。みんなが体験できればよい。

Q6 Q4の内容を誰かに伝えたか？

■誰に

◇家族や身近な人

- ・手話は我が家で話題になっており身近になりつつあるが、改めて伝えたい。
- ・自分が体験したことを、日常の会話の中で話す。
- ・友人に様々な機会に、「自分には解らないこと、説明するのが難しいことがたくさんある」ことを話してみたい。
- ・伝わり方が特別にならないように伝える。
- ・家族に口頭で、今回の資料を使いながら伝える。

■どんな方法で

◇名前の手話を覚える

- ・名前の手話をイラストで示す。多い名前や珍しい名前等。

◇映像を見る

- ・当日録画した映像をみてもらう。
- ・インターネットで公開されている「しゅわえもん」の活動を家族に見せる。
- ・インターネットの動画サイトを利用して、より多くの人へ届くように情報発信する。

◇多様な方法による読み聞かせ

- ・図書館のイベントで、声による読み聞かせに加えて、手話による読み聞かせを行う。

◇教育現場で体験

- ・表情や表現がいかに重要かを知る機会。
- ・小中学生に体験してほしい。伝えたい！という気持ちを大切にしてほしい。
- ・小中学生が、手話を使っている人と一緒に活動。
- ・手話という言葉があることを説明し、聞こえない人とまずはコミュニケーションをとると理解が深まることを体験してもらおう。

■どんな工夫をして

◇多様な人に伝える工夫

- ・学生時代に演劇活動し、遠くの座席まで伝える苦労はわかっていたつもりだったが、また違う視点を考えなければ伝わらない。
- ・読み聞かせをする相手に、意味、ニュアンス等、何を伝えたいのかにより変わる。
- ・多様性理解のため、多言語による実施もよい。

3) 全体について

Q7 これまでで気づいたこと

■人権・平等・尊厳

- ・第1回であった「心・やさしさ・思いやり」と「人権・平等・尊厳」の違いについての話が印象深い。
- ・「心・やさしさ・思いやり」が重要と思っていたが、感情に左右されない「人権・平等・尊厳」の意識が必要という話は、自分の考え方に大きな変化をもたらした。

■相互理解の大切さ

- ・UDとは、オリンピックで使われたピクトグラムみたいなものかと思っていたが、対話を通してどのように相互理解を深めるのかがまず必要だと思い知らされた。
- ・聴覚障害者と、スマホのメモ帳を使って仕事や生活について話したことが楽しかった。
- ・互いの違いを認め「伝わっていないかもしれない」「もっとわかりやすく伝えられないか」と一歩立ち止まって考えることが重要。推測ではなく、相手の話を聴き、汲み取ることで初めて知ることができる。
- ・「障害者」という枠組みにはめないことが大切。日常的に関わる中で理解を深めるとよい。それには、障害者が社会に出やすい環境づくりが必要。
- ・障害の有無に関係ない社会をつくるべき。そのためには積極的に知ることが重要。

■多様性を認識

- ・障害も様々、ニーズも多様だと改めて感じた。
- ・様々な経験を持った参加者と出会い、日々考えが深まっている。今後も学びを深めるため、様々な人の思いや経験を聞いて話したい。
- ・各人が意識していることが異なると感じた。
- ・UDは「障害者が不自由なく暮らすための手段」と考えていたが、例えば日本語の話せない外国人の日本での暮らしやすさを考える等もよい。
- ・健常者の方が心に壁をつくっていることもあると、気付かされた。

■多様な人が出会う機会をつくる

- ・友人は「障害者と接する機会がないので、どう接すればよいのかわからない」という。私もこのワークショップに参加する前はそうだった。障害者と接する機会を多く持つことが必要。区

民まつり等で一般の人と話す機会を増やすことはできないか。

■自分はどう考えるか

- ・川内さんの話に、日常の様々な場面で「自分はどう考えるか」の視点を持つことが大切とあった。新たな視点を持たなければと思った。
- ・人は物事を伝える時、主観的になりがち。ワークショップを通じて主観のずれを修正しつつ、自分はどう考えるのかを大切にしたい。

■伝える工夫

- ・相手によって知識や興味が異なるので、相手によって話し方を変える等の工夫が必要。
- ・その場限りの関係性で終わってしまうのは残念。その先へと繋がる関係性をつくりたい。
- ・人に伝えるということは、自分が言いたいことだけを言うこととは違う。絵や図にしたり触れたりする等、五感を活用する。
- ・職場の人に伝える。他者への理解や多様性に対する意識が、自分の知らないことを知ることでも得られることを、例えば「手話の読み聞かせ」体験で、どう感じどう工夫したかを報告することで伝えてみたい。

■学校教育で伝える

- ・学校教育に取り入れて、立場に違いのある人たちでチームをつくり上げていくことの大切さや楽しさを身につけてほしい。

■顕在化していない課題を掘り起こしたい

- ・人権の考え方は、国、地域、その人が置かれている立場によっても異なる。日本社会に人権意識を根付かせるためには、「思いやり」が大切という意見も「尊重」しつつ、思いやりに「感謝」しながら、人権意識を高めていく必要があると思う。論理だけで人は動かないと感じた。

■その他

- ・出前授業で、松葉つえを使ったことのある子どもの多さに驚かされた。
- ・相談員の中にもいろいろな活動をしている人がいるので、今回の企画の時に相談してほしい。
- ・全体を通じて貴重な体験ができていると感じる。
- ・体験したことを、感じ方の違いはあっても共通点を見出し、そうかと認識することが大切。